

藤原老のレチスタンス

ある日私は神崎製紙の加藤さんに連れられて白金今里町のお邸で、藤原翁の招待を受けた。當時藤原邸の主要部分は接収になっていて、翁は和風の附屬家に住居っておられた。ちょうど奥様が長逝されて、その御遺骸が部屋に安置されていた頃のことである。

何故私が翁の招待を受けたのかと言うと、加藤さんを通して翁のこまかい身近の事に少し許りが骨を折って差上げた返礼ということであった。翁の接待ぶりはなかなか丁寧に丁寧で、後輩である加藤さんに対しても、若造の私に対しても、極めていんぎんであった。

翁は茶人として有名な人だが、談々お茶の話になってきた。その時のお話は翁の人柄や機知を知る上において面白いと思うので、ここにその大要を御紹介したい。

「私が茶人であることをどこから聞いたのか、近頃、司令部の高官連中からしきりにお茶を教えてくださいと言ってくる。そこで私は、とても人様に教えるほど茶道の名人でもないし、殊に目下自分は追放の身であって人前に出るのさえ謹慎しなければならぬ立場だ。それなのに当の司令

部の高官に茶道を教える等をといてはとんでもない話だと思つ。といふことで再三断り續けてきた。ところが先方はどうしても引下らない。

中でも例の追放の親玉ホイットニー代將の夫人などは、かういふて口説くのである。銀座の街頭などに本当の日本があるように私共はどうしても思えない。日本の高雅な本質は、山の手の住宅地の人の見えないところに潜んでいるように思われる。私の父はアメリカで造園の仕事をしていて、日本の本当の文化に少なからぬ興味をもっている。自分達ははるばる日本に来て、その高雅な文化やたしなみに触れて、これを父に伝えてあげたいと念願している。これは全くノンポリテイカルなことだから是非この願いを叶えてもらいたいといふ。もし叶えてもらえなければ押しかけるといふような始末であつたので、到頭私も我を枉まげて一日、司令部の高官夫人連を招待したのである。

その日の生花は、ちょうどその季節であつたのでバラの花とし、掛軸は「切通しの明神」にした。ところがホイットニー夫人が「バラの花というものはポックリ首が落ちるといふので日本の武士は嫌われるそつですな」と尋ねるので、私は「いやお茶の道では自然を愛します。たまたま馥郁とバラの花が咲いている。それをそのままお目にかけるわけです」と応えた。次に彼女は「そこにかけてある掛軸のいわれを承りたい」といふので、私は次のような話をしてあげた。

昔、支那から大使がみえて、大きい水晶の玉を天子さまに御献上になられた。そして、その大使は、天子さまに、「この玉の中央に小さい穴があいております。もし御国に、この小さい穴にどうすれば糸を通すことができるかをお知りの智慧者がおりましたらどうか」と質した。そこで天子さまは多くの侍従を呼んで聞いてみたが誰からも明答がでない。ところがその中の一人の侍従が進み出て、「私のうちに老父がおります。学芸に通じた父です。一つ父に伺ってみましょう」と奉答すると、天子さまは大變御満悦で「それでは是非そのようにはからえ。見事にこの解答が出れば、そちの父に対しては何なりと願いを叶わせてつかわす」と仰せられた。

その侍従は早速帰宅して、床の下（当時老人は野や山に捨てるならわしになっていたが、その侍従は孝行者で、父を捨てるに忍びないので、床下にかくまってあった）にいる父に御下問の趣を話すと、その父は「それは何でもないことだ。蟻の足に細い絹糸をつけてその穴の中に入れなさい。同時に穴の一方の出口に蜜をつけておきなさい。そうすれば蜜を求めてその蟻はせつせとその穴を通り抜けるにちがいないから」と答えたのである。

賞 鑑 物 人

その旨を天子さまに言上すると殊の外天子さまはお悦びになり、何なりと願いを聞き叶えてやるから申出るようにならうという有難い御沙汰があった。その侍従は早速、老父の願望を聞いたところが、老父は、「願いと云うて何にもない。唯老先の短い自分であるから、せめて床の上に住わせ

てもらいたい」と、いうのであった。「その老父を祭ったのがこの明神です」と私は彼女達に説明した。自分もその老父と同様に追放の日蔭者になっているので、自由な身にしても罰はあたるまいという願望とレジスタンスとをこめた話をしたのであるが、さて彼女達に判ってもらえたかどうか。

と言つて銀次郎翁は哄笑された。(昭、三〇・八)